

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 モラディー・オラング シェイダ
Moradi Owrang Sheida

本論文は、日本の伝統的建築あるいは現代建築において空間を構成・組織化する独自の特性といえる「奥」の概念について分析したものである。

本論文は、空間構成における「奥」という概念の2つの側面に基づいている。

1つ目の側面は、空間を「層として形成する」ことが重要であり、空間構成法として用いられているということである。このように空間を「層として形成する」ことを障壁と境界という観点から検証した。無形の存在である空間は有形な対象によって理解される。これらの障壁あるいはある種の境界は身体的あるいは心理的に知覚される。同様にこの概念は身体的な奥行きのみならず心理的な奥行きも意味する。

2つ目の側面は、現代建築においても「奥」のような空間構成は見られ、ウォールシステムやフレームシステムのどちらにおいても、空間を「層として形成している」ととらえることができる。フレームシステムにおいては空間は相互に浸透し、積層化された知覚は、より知覚的な動きを伴う。そしてウォールシステムにおいては空間は分節され、空間の積層は身体的動きによって知覚される。それゆえ本研究は空間の構成や組織化に大きく関わっている。

本論文は以下のように構成されている。

第1章では、日本建築に特徴的な「非対称性」と「奥」の概念について、日本的な空間概念の背景をふまえて、導入した。

第2章では、日本の空間概念について概観した。そしてそこから日本的な建築空間の原則として、非対称性、流動的な空間、フレキシビリティ、非完全性、自然との関係、空間の連続性をあげた。

第3章では、「奥」について、関連する「間」、「表／裏」、「内／外」、「縁」などと比較しながら定義した。

第4章では、「奥」という概念の定義に基づき、伝統的なものから現代に到る日本建築において、どのようにして空間の多彩な要素が空間を「層にすること」と「層になること」につながるかを明らかにするために、空間へのアプローチを分析するダイヤグラムの手法を検討した。この分析手法により空間の構成の要素が示され、「奥」の有り様を記述することができる。

第5章と第6章では、これらの検討してきた分析方法を考察、立証するために、実例を対象に分析を行い、先に述べた原則がどのように適用されるかについて検討した。検討の対象として、第5章では安藤忠雄による教会・寺社建築から5事例を、第6章では、伝統的日本建築として出雲大社、茶室、町屋を選定した。

この考え方は二つの重要な要素に関係する。すなわち、「中央」に関する意味と、「境界」をすることに關する意味である。「境界」には「身体的な境界」あるいは「知覚的な境界」がある。空間の知覚は環境の情報を利用したり受容するプロセスにある。この視覚は「境界」を通り抜けて「奥」へと向かう。

建築空間における空間体験は動きや時間と深く関連する。「境界」と空間の要素は間接的に関わり、その関係は重要である。これらの「境界」は奥行き、知覚において空間を関係づけ、連続的につないでいる。

これら「境界」は動きのシステムにより空間的な複雑さに結びついている。空間を解釈するにあたり、2つの型の動きがある、すなわち「身体的な動き」と「知覚的な動き」である。どちらの型も面の配置によって決定づけられ、どちらも空間的な構成を引き出す。ここでの検討の意図は、空間知覚プロセスについて秩序だった考察を与えること、及びそれらの直感的なプロセスを具体化することである。

結論として、伝統的なものから現代に到る日本建築において、様々な空間の知覚が包含される。提案してきた原則を用いた分析手法は、現代建築においても適用でき、かつ妥当であったと考える。さらに、この分析手法は、新しい現代日本建築の空間構成・組織にこの概念が認識できることを示唆するものであるとしている。

本論文は、「日本建築史」あるいは「現代日本建築論」を論じるものではない。また日本の思想や文化、哲学や美学を論じるものでもない。日本の建築にしばしば特徴的に現れる空間構成・空間組織化の一面を、日本の伝統とは関わりない対照的なイスラム圏のバックグラウンドを持つ観点から見出したものである。その意味で建築空間の一つの読み取り方として新しい観点をもたらしたといえる。

以上のように本論文は、幅広い建築物を対象として適用可能な建築計画学的な空間解釈の一つの方法を提示し、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。